

## バッハ「復活祭カンタータ」BWV 4の作曲過程と楽曲構成

今回はカンタータ「キリストは死の縛めにあった」(復活祭カンタータ) BWV 4の作曲過程と音楽的構成を考えていきます。

始めに参考文献をご紹介します。主に利用したのは Werner Neumann “Handbuch der Kantaten Joh. Seb. Bachs” 4., revidierte Auflage 1971, Breitkopf & Härtel, Leipzig (ヴェルナー・ノイマン「J. S. バッハ カンタータハンドブック」改訂第4版、1971年 ブライトコップ&ヘルテル、ライプツィヒ)で、現存するだけで249曲に及ぶカンタータ全曲に詳細な注釈をつけているほか、作曲年、教会歴、コラール旋律、ソリスト(歌唱声部・器楽別)、タイトル名、パロディーの原曲など、さまざまなキーワードによる索引を掲載した大変便利な一冊です。補足的に磯山・小林・鳴海編「バッハ事典」(東京書籍 1996年)を用いたほか、カンタータの研究書として樋口隆一「バッハ カンタータ研究」(音楽之友社 1987年)と、クリストフ・ヴォルフ、トン・コープマン他、磯山雅監訳「バッハ カンタータの世界 I」(東京書籍 2001年)、バッハの年代記についてはヴェルナー・フェーリクス、杉山好訳「J. S. バッハ 生涯と作品」(国際文化出版社 1985年)を参考にしました。

さて、「清水ヶ丘の風」第14号で山田様が書かれているように、カンタータ BWV 4はバッハの教会カンタータの中では最初期のものです。1707年、アルンシュタット新教会のオルガニストをしていた時、当時ルーベック聖マリア教会のオルガニストであったブクステフーデの演奏を聴くために取った4週間の休暇を無断で3ヶ月に延ばしてしまったために町の宗務局からにらまれ、当局と対立したバッハが、新たな職場を求めてミュールハウゼンのオルガニスト募集に応じて作ったのがこのカンタータであったと言うわけです。結果はめでたく採用となりました。この曲はバッハにとっても自信作であったらしく、彼がワイマール時代までに書いた初期のカンタータとしてはただ1曲、後にライプツィヒ聖トーマス教会でのレパートリーに取り入れられています。

音楽はバッハのカンタータ中、他に例のない徹底したコラールカンタータで、全8曲の内、冒頭の器楽によるシンフォニアを除いた7曲がすべてタイトル名のコラールを定旋律とした一種の変奏曲(コラールパルティータ)となっています。バッハはこの曲によって彼のコラール処理能力の高さをアピールしようとしたのかも知れません。ライプツィヒ時代のカンタータに見られる華々しい名人芸こそありませんが、終始靈感に満ちた、簡潔で緊張感の高い感動的な作品です。

それでは一部既刊と重複しますが作品の全体像から見ていきましょう。BWV 4は復活祭第1日用カンタータで作曲は1707年(1708年初演?)、ただし初稿は現存しません。1724年にライプツィヒで改訂し、その年と翌年に再演されました。管楽器の導入と終曲としての単純コラールの使用はこの時に行われました。コラール旋律は11世紀のラテン語聖歌「**超越しの生贄を讚美せよ**」に基づき、歌詞はマルティン・ルターの作になるものです。

コラールというのはプロテスタントの礼拝で会衆が歌う音楽(賛美歌)ですから、広く民衆に親しまれてきた聖歌や民謡、あるいは流行した歌の旋律に新しい歌詞を乗せたものが多いのですが、この曲も中世の時代から復活祭の聖歌として歌い継がれてきたものなのでしょう。宗教改革を行ったルターですが、たとえこれがカトリック教会で使われた聖歌であっても、会衆がよく知っている曲

に創作詩をつけてルター派の復活祭礼拝で使おうとしたに違いありません。

このカンタータから受ける古風な印象は、全曲がホ短調で出来ているにもかかわらず、この旋律がホ短調ともロ短調とも言い難い、ドリア調という「旋法」(調性が確立する前の古い音階)の音楽であることによるものです(ドリア調はレ(全音)ミ(半音)ファ(全)ソ(全)ラ(全)シ(半)ド(全)レの音程関係を持つ旋法で、レ以外の音から始まってもこの関係が認められればよい)。このコラールに中世音楽の雰囲気を感じればこそ、バッハはこのカンタータに珍しくもツィンク(トランペットの原型と言われる管楽器)という、当時すでに過去のものとなっていた楽器をあえて使ったのでしょう。コラール旋律と楽器の使用法が相まってこのカンタータを古風に仕立てているのだと思います。

編成はソプラノ、アルト、テノール、バスのソロ(合唱で歌うことも可能)と4声合唱、ヴァイオリン I、II、ヴィオラ I、II、通奏低音(チェロ、バス、オルガン)、ツィンク(通常トランペットで代用される。ソプラノ声部をユニゾンで補強)、トロンボーン I、II、III(下3声部を補強)です。

以下は各曲の詳細です。なお、このカンタータには多くのバッハ作品と同様(第2曲以外)テンポやダイナミクス(強弱)の指定がありません。それらの設定は指揮者の解釈に委ねられます。

#### 第1曲 シンフォニア 4/4 ホ短調

短い(14小節)5声部の弦楽器によるアンサンブル。荘重かつ悲劇的な音楽で、コラール的な響きとコラール旋律の引用(ヴァイオリン I の5-7小節)が認められます。

#### 第2曲 コラール第1節「キリストは死の縛りにあった」 4/4 アレグロ-アラ・ブレーヴェ ホ短調

二つの短い間奏(36, 37小節、46, 47小節)以外は密度の高いコラールファンタジー。拡大形の定旋律はトランペットに補強されたソプラノが歌い、アルト、テノール、バスは模倣様式の音楽である。Halleluja(アラ・ブレーヴェ)はモテット風の展開を見せる。ヴァイオリン I、IIは声楽から独立したパートを形成し、ヴィオラ I、IIと通奏低音はトロンボーンに補強された下3声に寄り添います。

#### 第3曲 コラール第2節「死を誰も従えられなかった」 4/4 ホ短調

コラール編曲の二重唱とオスティナート(一定の音型を持つ動機を繰り返す)バス。定旋律は拡大形。ソプラノにはトランペット、アルトにはトロンボーンが加わったカノン風な2声の音楽です。

#### 第4曲 コラール第3節「イエス・キリスト 神の子は」 4/4 ホ短調

コラール編曲。テノール(定旋律)、ヴァイオリン(I+II)、通奏低音によるトリオ。

#### 第5曲 コラール第4節「それは奇妙な戦いだった」 4/4 ホ短調

通奏低音を伴うモテット。アルトが拡大形の定旋律を歌います。コラールの各行がコラール旋律の短縮形でフィギュラル(定旋律に伴奏のような形で別の声部が演奏される音楽)を形作ります。

#### 第6曲 コラール第5節「これは真の過越しの羊」 3/4 ホ短調

コラール編曲。バスの独唱と弦楽器、通奏低音。定旋律は各行の前半がバスに、後半がヴァイオリン I に振り分けられています。バスの音域はほとんど2オクターブにも及びます。

#### 第7曲 コラール第6節「だから私たちはこの大祭を祝う」 4/4 ホ短調

コラール編曲の二重唱。ソプラノとテノールのカノン。付点リズムのオスティナートバスを伴い、定旋律はソプラノとテノールに振り分けられます。

#### 第8曲 コラール第7節「さあ私たちは食べ生きよう」 4/4 ホ短調(ドリア調)

合唱に全楽器が加わった4声の単純コラール。密度の高い豊かな和声付けがされています。

【後記】「清水ヶ丘の風」もおかげさまで17号を数えるに至りましたが、これから演奏会前まで、楽事委員は事務局長と共にプログラムの編集に当たるため、本号を以て今期の「清水ヶ丘の風」はひとまず休刊とさせていただきます。これまでご愛読いただき有り難うございました。(新井)